

(6) 重要な大型哺乳類について

(杉野)

希少種の特別調査と同様に絶滅危惧種に指定されているニホンカモシカやツキノワグマの分布や生息状況の調査も行っています（ツキノワグマについては【ツキノワグマ調査】P175を参照）。この2種類の数には現在増加していることを確認しており、あきる野の自然に大きな変化が起きていることを示しています。

◎あきる野のニホンジカ・ニホンカモシカ

○ニホンジカとニホンカモシカ

あきる野市には、大型哺乳類のニホンジカ・ニホンカモシカの両種が生息しているのを目視や痕跡から確認しています。全国的にシカ類の森林被害・農業被害が多発している報告を目にしますが、あきる野においては大きな被害は確認されていません。しかし、両種とも森林への依存度が強く、今後、個体数の増加などで森林被害が出るのが懸念されます。

これまでに確認した痕跡から、ニホンジカ・ニホンカモシカが同一の地域で生息していることが推察されます。ただし、夜行性のニホンジカ、昼行性のニホンカモシカと時間帯を棲み分けていると思われる。

このようなパターンは、ニホンジカ・ニホンカモシカの調査研究の報告に記載がないので、あきる野の場合は特異な例と言えるかもしれません。

○ニホンジカとニホンカモシカの違い

鳥獣保護管理計画策定マニュアルによると以下のような違い（抜粋）の記述があります。

	社会	密度	食性	繁殖力
ニホンジカ	♀♂別の群れ	数十頭/1 km ²	グレイザー※1	高い
ニホンカモシカ	ペア	25/1 km ² MAX	ブラウザー※2	低い

グレイザー※1：主にイネ科の植物や草本類

ブラウザー※2：木の葉などの大きな葉

上記の表のように、ニホンジカは群れで地表の植生を採餌するため、林床植生の衰退による表土流失を招く国土崩壊の要因を作っています。

ニホンカモシカの場合、行動がペアで採餌圧力も弱く、環境負荷はニホンジカほど高くはありません。樹木への被害は、ニホンジカ、ニホンカモシカの痕跡（剥皮・角研ぎ）の判別は非常に難しいため、被害実態を把握できないのが現状で目視や糞などで生息を判断するようになります。

○ニホンシカの保護政策

有史以前からの狩猟動物で縄文遺跡からもシカの骨で作られた矢尻、釣り針が発見されています。近代になっても狩猟圧による個体数の減少は続き、1892年に1歳以下のシカの捕獲禁止、1901年禁猟となりますが、1918年には狩猟鳥獣に指定されます。1947年にメスシカが禁猟となりますが、1994年にはメスシカも狩猟鳥獣に組み入れられます。このようにシカの保護管理は狩猟鳥獣と保護との間を揺れ動いていると言えます。このことは、シカは狩猟圧に弱くすぐに個体数を激減させますが、繁殖力が強く保護下に置かれるとすぐに個体数が増加する特徴があり、生息個体数を管理していくことがきわめて難しい動物と言えることが分かります。

○ニホンカモシカの保護政策

かつては狩猟鳥獣としてその数を激減させました。保護鳥獣となっても密猟などが横行して個体数の増加は見られなかったのですが、1934年天然記念物に指定され、その後1955年特別天然記念物に指定されて以降は、密猟行為も厳罰化されて、保護が徹底されました。繁殖力が弱く、短期間で個体数の増加は見られませんでした。近年、個体数の増加、個体群域の拡大など生息数が著しく増えてきています。あきる野においても養沢地区、軍道地区などで人家からさほど遠くない林内での生息痕跡が見られます。

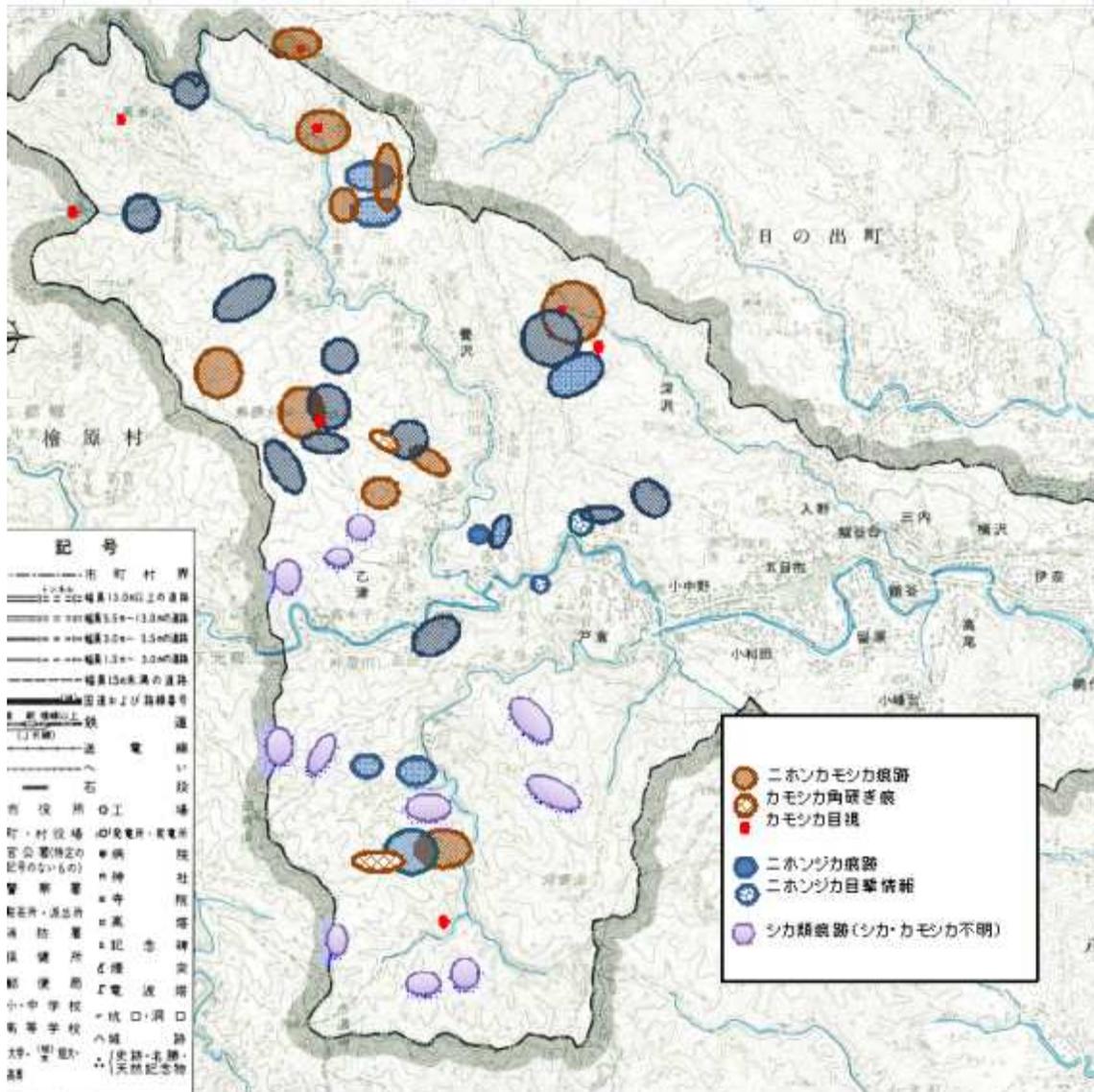
しかし、生息密度も低く、行動もペアや親子となり、採食圧も弱く、すぐに森林被害につながる報告はありません。しかし、今後は、あきる野でも他の被害地域のように、農業被害に至る可能性は十分にあります。

カモシカは昼行性で保護されているため人を恐れなくなっていることで、農地へ出没して農業被害が拡大しているとの報告もあります。1979年に特別天然記念物から天然記念物地域指定として、農業被害が出ている地域での保護管理（頭数調整の捕殺）ができる法整備がされていますが、地域指定の設定が進んでいないため、特別天然記念物の指定から地域指定への変更は30年以上経過しますが行われていないのが現状です。



シカ糞

ニホンジカ・ニホンカモシカ生息分布



(図 1)

〇あきる野のニホンジカ・ニホンカモシカの分布

山間地域には万遍なく生息していますが、大まかに分けると深沢地区、養沢地区、盆堀地区の3グループに分かれているように判断できます。それぞれの地域のシカ群生息域でカモシカを目視しています。

シカについては夜行性ということもあり、目視での確認は難しいので、一般的なシカ調査のように明け方での調査が必要になります。

また、痕跡についてもニホンジカとニホンカモシカの痕跡を明確に分けられるように調査精度を上げてゆく必要があります。

図 1 を見ると養沢・深沢地区のシカ類については、奥多摩方面からその個体群の拡大や狩猟圧によって移動してきた群れ分布と思われます。

また、盆堀地区の生息は、檜原・八王子からの侵入群と思われます。

奥多摩からの侵入個体群は関東山地個体群に位置し、東京、埼玉、群馬、長野の隣接部にコアエリアが存在するグループと言えます。一方、盆堀については、檜原経由で関東山地群の移入ケースと丹沢個体群の移入ケースの 2 つが考えられます。

丹沢個体群の移入ケースの場合、関東山地群との遺伝子交流の接点となり、遺伝子多様性上、非常に重要な個体群と言えます。この地域での個体数の極端な減少があった場合、関東山地群の辺境地に位置するあきる野の個体群は遺伝形質の孤立化を招きかねない個体群となり、保護管理の重要な個体群と言えます。盆堀の個体群については、その動向を見続けていく必要があります。



←カモシカ糞

↓カモシカ



(7) 外来生物（動物）について

(バブロ)

市内で確認された外来生物の多くは、日常的によく観察され、カラスやスズメのように身近な存在となっています。特に、山地と街の間のバッファゾーンである里地里山で多く確認されました。

市内で確認した主な外来種は、アライグマ、ハクビシン、タイワンリス、ガビチョウ、カオグロガビチョウ、ソウシチョウ、アカミミガメ、ウシガエル、アメリカザリガニですが、これらの中で、アカミミガメとアメリカザリガニ以外は、法律の規制を受ける特定外来生物に指定されています。これらの外来種は、直接、生態系や在来種、人間までにも大きな影響を与えている生物です。

タイワンリスは、近年、秋川沿いの左岸に位置する緑地を中心に生息するようになりました。ニホンリスが生息しているエリアに進入している可能性があります。

ソウシチョウ、ガビチョウ、カオグロガビチョウは、数多く生息しており、特に、ガビチョウは、四季を通じて市内の里地里山の全地域に生息し、戸倉地区の盆堀川、逆沢川、小宮地区の養沢川などでもよく見られます。

アカミミガメは、秋川の下流や市内の公園などで確認されており、両生類、魚類、在来のカメなどを減少させる要因の一つになっています。

ウシガエルやアメリカザリガニについても、アカミミガメと同様に、食圧の強い外来種であり、秋川の下流や市内の水田などに進入しています。これらは、ホトケドジョウ、トウキョウダルマガエル、トウキョウサンショウウオなど、希少な生物にも大きな影響を与えています。

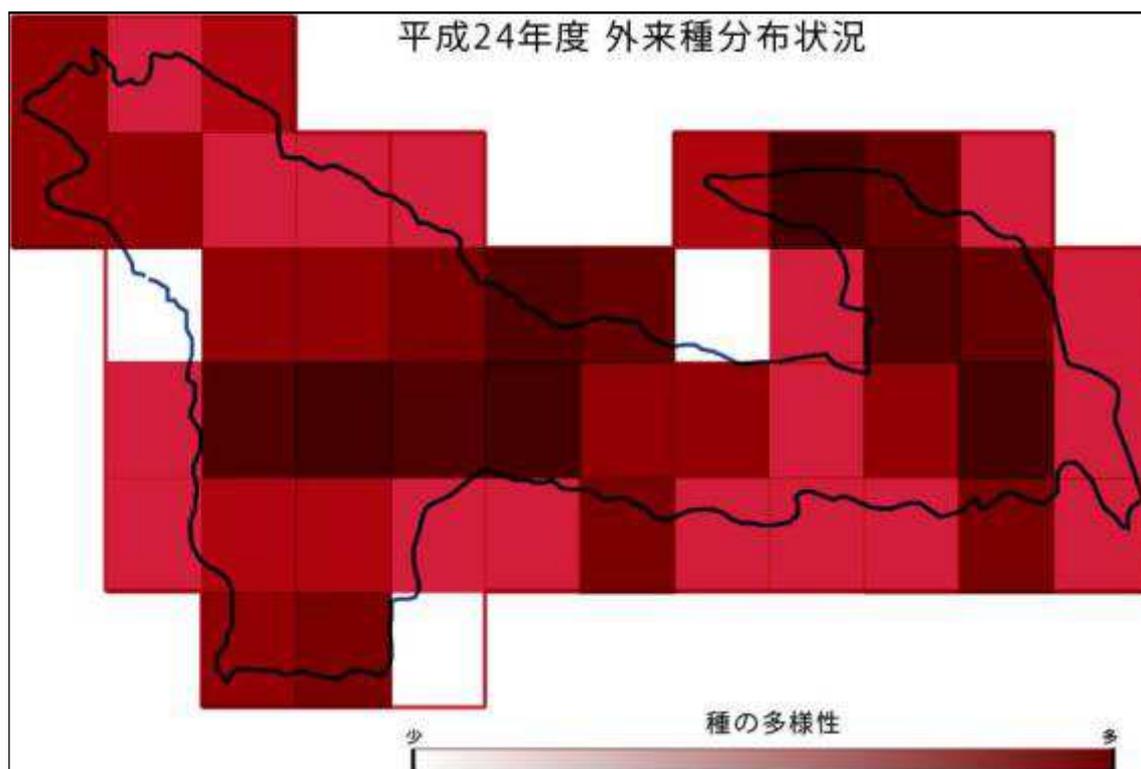
最も注目されている外来種であるアライグマは、急速に個体数が増加していると考えられ、現在は、市内全地区の里地里山で確認されており、地域によっては、農作物や文化財など、または人にも被害を与えているとともに、キツネなどの哺乳類のすみかを奪い、両生類や魚類を捕食してしまうなど、希少な生物の生態にも悪影響を及ぼしています。特に、トウキョウサンショウウオなどの小動物をよく捕食することが確認されています。また、市内の全ての環境を通し、最も広く生息していると思われるハクビシンも、アライグマと同様に個体数が多く、自然や農業に大きな影響を与えています。

このように、市内の自然のバランスが大きく崩れる可能性があることから、外来種の調査や防除などの対策の強化が必要です。

平成24年度から環境政策課では生態系を守るため、外来生物対策に取り組んでいます。森林レンジャーは平成25年2月からその対策の一つである捕獲活動に参加し、アライグマ4頭とハクビシン1頭の捕獲に成功しました。この活動の成果により、在来種の生息環境が守られると期待されており、結果的に

平成25年の春のトウキョウサンショウウオの産卵において目立った被害は見られませんでした。

確認された外来種の市内における大まかな分布状況について、次にメッシュマップで示します。



外来種は、里地里山及び水辺環境において多く確認されました。特に市街地の近くに存在する侵入しやすい緑地や林の周辺で被害を起し、大きな環境問題となっています。

＜外来生物の写真＞



アライグマ（動物園で撮影）



ハクビシン



台湾リス（鎌倉市で撮影）



ガビチョウ



カオグロガビチョウ



ソウシチョウ



アカミミガメ



ウシガエル